日本人だけが知らない世界の常識

第八話　記念日編（後編）

　記念日につきものといえば、プレゼントですよね。誕生日、クリスマス、入学式、卒業式、結婚式、どんなときでもプレゼントは欠かせません。特に身近な人からのプレゼントは、小さなものでも非常に心が温まります。贈り物というのは、人を幸せにする力があるのです。

　とはいえ、もらったプレゼントが嬉しいかどうかはその文化にもよります。たとえば、首狩り族はナマ首を乾燥させてネックレスにしたものを贈っていましたが、現代日本に生きる私たちが、恋人からそんなものをもらったら、泡を吹いて卒倒してしまうに違いありません。もらって嬉しいものというのは、それぞれの文化の価値観に根ざしているのです。

　ナマ首のような極端なものでなくても、贈り物の花の種類や色が場違いなだけで、お祝いムードをぶち壊してしまうこともあります。

　以前、テレビで歌手の和田アキ子さんが話していたのですが、かつて彼女がある音楽の賞の授賞式に参加したとき、壇上で手渡された花束が「白い菊」だったそうです。

　ご存じだと思いますが、白い菊というのは、葬儀のときに故人に捧げる花です。そう、当時、和田アキ子さんの受賞を妬んでいた何者かが、贈呈用の花を白い菊の花と取り替えてプレゼンターに渡したのです。彼女はそのときは気がつかなかったそうですが、あとでテレビを見ていた家族から「なぜおめでたい席なのに白い菊の花なんてもらったの？」と指摘され、初めて知ったのだとか。恨みのこもったゾッとするお話ですよね。

　とはいえ、この葬儀用の花も、文化が違えば種類も異なります。日本では白い菊ですが、タイではランですし、インドではプルメリアです。つまり、タイ人やインド人がお祝いの席で白い菊をもらっても何とも思わないですが、ランやプルメリアを贈られれば怒りだすはずです。贈り物がどういう意味を持つかは、その文化に大きな影響を受けるのです。

【ロシアのプレゼント】

　潤一郎さん（三十八歳）は、ロシアからウオッカやキャビアを買い付け、日本のレストランに卸す仕事をしていた。もともと南米で似たような仕事をしていたのだが、会社の都合で急にロシアとの取引を任されることになったのだ。

　ロシアでの滞在に慣れた頃、潤一郎さんは現地の友人からロシア人女性を紹介され、付き合うことになった。相手は二十七歳。一回り年下の若い彼女に潤一郎さんは夢中になり、一年間うまく交際が続いたら結婚しようと約束した。

　約束の一年が経とうとしたある日、恋人が誕生日を迎えた。潤一郎さんはここぞとばかりに高級レストランへ誘い、年齢と同じ二十八本のバラをプレゼントした。そして、一呼吸おいてからプロポーズをしようとした。

　ところが、恋人はバラの花束を手にしたまま、ムスッと不貞腐れている。どうしたのだろう。理由を尋ねると、彼女は目に涙を浮かべて怒鳴った。

「もういい！　あんたなんか知らないから！」
　潤一郎さんは訳がわからず、慌てふためいた。
　そのとき、隣のテーブルにいた老紳士が立ち上がり、潤一郎さんをトイレへ連れていった。彼は潤一郎さんの肩を叩き、こう忠告した。
「君は日本人だから知らないのだろう。ロシア人は、同じものが偶数個あるプレゼントを不吉だと考えてとても嫌うんだ。お葬式などで同じ花を偶数本供えるのが習慣になっているからね。彼女が不愉快になったのは、そのためなんだ。もし君が彼女に喜んでもらいたいなら、一本だけ違う花を入れればいいんだよ」
　潤一郎さんは近くの花屋へ走り、赤いバラの中に一本だけ白い菊を入れた花束を新しくつくってもらった。そしてレストランにもどり、改めてそれをプレゼントした。
「ごめんな。俺、ロシアの文化について知らなかった。こっちの花束を贈るから、俺と結婚してください」
　彼女は微笑み、潤一郎さんに抱きついた。レストラン中のお客さんがそれを見て一斉に拍手をした。

　ロシアでは、偶数は縁起が悪い数とされています。そのため、お祝いの席で同じものが偶数個ある贈り物をするのはよくないことと考えられているのです。
　このほか、ロシアで縁起が悪い贈り物とされているのが、ハンカチですね。ハンカチは悲しみの涙を拭くものだから人にあげてはならないといわれているのです。
　ロシアには他にも面白い迷信があります。二つご紹介しましょう。

　人の足を踏んでしまったら、踏み返してもらう。
　他人の足を踏むと、その人との縁が途切れてしまうという言い伝えがある。そのため、間違って踏んだら、踏み返してもらう。

　忘れ物をしたら、他人に取ってきてもらう。
　忘れ物を取りに帰ると、災いが起こると考えられている。そこで、家に忘れ物をしたら、自分で取りに帰るのではなく、人に持ってきてもらう。

　ところで、数字に話をもどすと、日本では「４＝死」「９＝苦」などが縁起の悪い数字とされています。特に、病院の部屋番号などでは、患者さんを嫌な気持ちにさせないように使用が控えられています。
　お隣の中国でも似たようなことがいえるようです。中国では「４＝死」「７＝怒」「１３＝痴」「１４＝死」「１８＝地獄」などが縁起の悪い数字とされています。そのため、病院や高級ホテルではなるべくつかわないように配慮しているのだとか。
　日本と中国では、偶数と奇数の好みが異なります。日本では、１、３、５、７といった奇数が縁起がいいといわれています。理由として、陰陽道では奇数が「陽」を示し、偶数が「陰」を示すと考えられているからです。１月１日、３月３日、５月５日、７月７日など、奇数のそろった日がめでたい祝日になっている一方、２月２日、４月４日、６月６日など偶数がそろった日はそうではありません。

ちなみに、７５３などは三つの奇数がそろっていますから、とてもめでたいとされているのです。
一方、中国では反対に偶数こそが縁起がいいと考えられています。彼らは「６」「８」「１２」をよく好み、お金を贈る際も偶数の金額にします。日本では結婚式の祝賀金は三万円（帝国ホテルなど高い場所だと五万円か七万円）という奇数の金額を贈るのがしきたりですが、中国では偶数になります。このへんからも、日本と中国の数に対する考え方の違いがわかるのではないでしょうか。
次に、中国におけるプレゼントの話を見てみましょう。

【中国のプレゼント】
幸恵さん（五十八歳）は専業主婦である。彼女には、二十六歳になる娘が一人いた。娘は日本で自営業を営む中国人男性と恋に落ち、二年半前にそのまま結婚した。二人が幸せならそれでいいと思い、幸恵さんは国際結婚にも一切反対しなかった。
ただ、幸恵さんには一つだけ気にかかっていたことがあった。娘はアルバイトをしながら東京でギリギリの生活をしていたため、夫に婚約指輪を買ってもらったときのお返しの品を贈ることができなかったのだ。幸恵さんは、中国人の義息子に申し訳ないと思っていた。
ある年の正月、娘夫婦が実家に遊びにくることになった。幸恵さんは、婚約指輪のお礼を娘に代わって義息子に買ってあげようと思い立った。一般的には高級腕時計を贈るという話を聞いていたが、なにかの折りに彼が亡き父親の形見の腕時計をしていると教えられていた。そこで、腕時計の代わりに置時計をプレゼントすることにしたのだ。
「これ、娘があげられなかった婚約指輪のお返しです。大切にしてください」
幸恵さんはそう言って置時計を渡した。彼は黙って受け取った。
一年が経った。そろそろお正月だというころ、娘から連絡があった。彼女は「夫がお母さんに会いたくないらしいので、実家には帰れない」と言ってきた。幸恵さんは首を傾げた。前年の正月以来会っていないのに、どうしたというのだろう。
娘は理由を次のように説明した。
「お母さん、彼に置時計をプレゼントしたでしょ。実は、中国では置時計を贈ることは、非常に縁起が悪いとされているらしいの。彼はお母さんから置時計をもらい、自分が好かれていないのだと思い込んでしまったのよ。それで二度と実家には行かないと言い張っているの」
中国語で置時計は「鐘(zhong)」と発音する。これは「終(zhong)」、つまり「死」や「終末」を意味する言葉を想起させるので、贈り物としてはタブーとされているのだ。また、「時計を送る（送鐘〈song zhong〉)」という言葉が、「告別式（送衷〈song zhong＝告別式〉)」と同じ言葉であることからも避けられている。
幸恵さんはそれを知らず、よりによって娘の婚約指輪のお返しに置時計を贈ってしまい、中国人の義息子を怒らせてしまったのだ。結局、その年の正月、娘夫婦は遊びに来てくれなかったという。

置時計のプレゼントが不吉だなんて、日本人には想像もつきませんよね。時計好きな私

は大喜びですが、国が違えばそうならないのです。
　他に中国で忌み嫌われるプレゼントとしては、「梨」や「傘」があります。「梨（li)」は「離」、「(san)」は「散」と同じ発音であり、離別を意味します。ゆえに、恋人や夫婦の間でプレゼントしてはならないことになっているのです。
　もう一つ、ご紹介したいのが「緑の帽子」あるいは「緑の服」です。中国では昔から緑の帽子を被ることは「妻を寝取られた証」とされており、男性が緑の帽子（そこから派生して緑の服）を贈られることは、これ以上ない侮辱なのです。日本の淑女は、たとえ彼氏や旦那さんが薄毛を隠そうとして帽子を被っていても、緑の帽子だけは決してプレゼントしないようにしましょう。
　読者の中には若い方も多いでしょうから、日本にもこうしたプレゼントのタブーがあることを知らないかもしれませんね。実は、日本にだってあげてはいけないとされているものはいくつもあるのです。代表的なものを列挙しましょう。

・クシ：「苦」「死」を想起させるため。
・靴下：足で踏みつけることを想起させるため。
・日本茶：葬儀の香典返しでよくつかわれるため。
・ガラス製品：「割れやすい」＝「関係が壊れる」を想起させるため。

　みなさんは、これらのものをプレゼントしたことはありませんか？　気にしない人同士ならいいでしょうけど、よく知らない人に対しては、こうしたプレゼントは避けた方が無難です。
　次に韓国のプレゼントのタブーを見てみましょう。

【韓国のプレゼント】
　韓国人女性のキムさん（二十八歳）は、昔から日本にあこがれていた。日本のファッション文化が大好きで、いつか日本で売っているようなキュートな服をデザインしたいと思っていた。
　だが、両親は大の反日家だった。曾祖父が戦争の際に日本兵に殺害されていたということもあるだろう。両親はキムさんが日本の服飾専門学校へ留学したいというのを猛反対し、オーストラリアの学校へ行かせることにした。
　キムさんはオーストラリアへ留学したものの、内心は不満だった。オーストラリアに独自のファッションがあるとは思えなかったからだ。そこで、学校で知り合った日本人男性の勇人君（二十九歳）と一緒にファッションデザインをすることにした。やがて二人は恋に落ち、卒業後には結婚を誓い合うまでになった。
　一方、両親からすれば寝耳に水の話だった。日本人と付き合わせたくないからオーストラリアに行かせたのに、なぜそこで日本人の結婚相手を見つけてくるのか。しかし、娘が一緒にビジネスをしている相手であることを考えれば、露骨に拒絶するわけにもいかない。両親は、仕方なくキムさんが連れてくる日本人男性に会うことにした。
　キムさんは一足早く帰国。二週間後に、勇人君は両親へのプレゼントをもって韓国のソウルにある実家を訪れた。彼は礼儀正しく挨拶し、出会った経緯や現在二人で手掛けてい

るビジネスの話などをした。話は盛り上がり、両親も少しずつ態度を和らげてくれた。
　ところが、勇人君がお土産を差し出した途端に事態が急変した。両親が包み紙を開け、なかから靴が出てきた瞬間に激怒したのだ。
「おまえはやはり日本人だ！　とっとと帰れ。娘はやらん！」
「ど、どういうことですか。これは、僕がビジネスとして手掛けているもので、お義父さんのために特注でつくったんですよ」
「そんなことは知らん！　日本人のような無礼な奴は嫌いだ。帰れ！」
　勇人君はわけがわからず、キムさんを見た。キムさんまで絶句している。自分はいったい何をやらかしてしまったのだろう。
　実は、韓国では「靴」を贈るのはタブーとされているのだ。「この靴を履いて、さっさと去れ」とか「靴を履いて逃げられてしまう」ということを示すからだ。勇人君はそれを知らなかったのである。
　結局、両親の怒りは収まらず、勇人君は退散するしかなかった。その後、キムさんとの結婚話が暗礁に乗り上げてしまったことは言うまでもない。

　日本人からすれば、オーダーメイドの靴をプレゼントするなんて、なかなか気がきいていると思うでしょう。しかし、文化が違うとここまで反応が違うのです。
　韓国と日本というのは、距離は近いですが、文化的にはかなり違います。たとえば、韓国人が日本に来てびっくりすることの一つに、日本人が猫をペットにしていることがあげられます。日本人には、猫を犬と同様にかわいがり、ペットとして飼う習慣があります。「招き猫」など、幸福をつかさどるものとされることも少なくありません。
　一方、韓国では犬こそかわいがるものの（食べもしますが）、猫をペットとして飼うことはほとんどありません。猫そのものが好かれておらず、「気味が悪い」とか「触ると汚い」とか「不吉な証拠」と考えられているのです。
　私の知り合いの韓国人女性が語ったところによると、日本人男性と付き合って家に遊びに行ったら、猫を飼っていて仰天してしまい、「いい雰囲気」になれなかったそうです。韓国人女性と付き合いたいと思っている日本人紳士諸君は、猫を飼わぬように気をつけた方がいいでしょう。
　生き物を不吉だと考える例は、他の国でも見受けられます。
　たとえば、日本では長寿の象徴とされる「カメ」は、中国では「あの世の生き物」とされて忌み嫌われています。また、日本の昔話などで親しまれている「ツル」は、ヨーロッパの一部では「死神」のようなものとして扱われています。海の生き物では「タコ」が有名ですね。日本人は寿司などで好んでタコを食べますが、ヨーロッパの一部では「デビル・フィッシュ」なんて呼ばれています。
　ところが、これと正反対なこともあります。日本では嫌われているのに、別の国では好かれている生き物もいます。何かご存知ですか？　ゴキブリです。アフリカやアジアの一部の国では、ゴキブリは「豊かな証」とされています。「食べ物があるからこそ、ゴキブリが集まる。だからゴキブリは豊かな証なのだ」と考えるのです。いわれてみれば、その通りですよね。しかし、日本人はそのゴキブリを「テカテカしている」とか「いきなり飛ぶ」とかいう訳のわからない理由で嫌っています。彼らからすれば、日本人がゴキブリを嫌う

理由はまったく理解できないでしょう。